

古沢町遺跡発掘調査報告

—弥生時代編—

1974

名古屋市教育委員会



序

旧金山体育馆跡地一帯で、昭和45年度から三ヵ年計画で始められた市民会館の建設工事も無事終了し、現在は本市の芸術文化の殿堂としてひろく市民各層のあいだで利用されております。

ここで報告する「古沢町遺跡」は、この市民会館建設途上で発見された縄文時代から歴史時代にいたるまでの複合遺跡であります。調査はいわゆる正式な発掘調査ではなく、愛知県社会保険診療報酬支払基金に勤務される和田英雄氏が建設工事現場で、同学の士とともに資料をたんねんに採集され、記録にとどめられたものです。遺構の実測図等に不備な点もあるかと思いますが、工事に追われながらの不充分な調査体制のなかでこれだけの仕事をなされた和田氏に対しては深く感謝する次第です。

縄文時代編の刊行を見てからはや3年の歳月がたとうとしております。当時本調査のご指導を顧っていた吉田富夫先生は不帰の人となられてしまい、この報文作成にあたって、筆者である和田氏はなにかとご苦労があったと思いますが、引き続き古墳時代編の執筆に意欲を燃やしてみえることを聞いており、この遺跡の報告が完結する日を楽しみに待ち望んでおります。

1974年11月

教育長 日比野 晓美

例　　言

- 1 本巻は、名古屋市中区古沢町旧金山体育館跡に所在した古沢町遺跡の調査報告書である。
- 2 古沢町遺跡からは、縄文時代・弥生時代・古墳時代の各期にわたる遺物が出土しており、縄文時代については既に『古沢町遺跡』『縄文時代編』として報告済みである。
- 3 本巻の執筆は、和田英雄が担当し、全体の校閲と第6章の執筆は大參義一が分担した。
- 4 図版類の作成も和田が担当したが、体裁およびその補正は、大參の指導のもとに井上光夫がこれを行なった。

本文目次

序

第1章 はじめに	1
第2章 遺跡発見の経緯	3
第3章 遺 跡	4
第4章 遺 物	7
第1節 表面採集の遺物	7
第2節 第1地点の土器	8
第3節 第2地点の土器	10
第4節 第3地点の土器	15
第5節 第4地点の土器	17
第6節 石 藝	19
第5章 おわりに	20
第6章 総 括	26

挿図目次

第1図	古沢町遺跡現況	1
第2図	地形図(25,000:1)	2
第3図	名古屋台地東縁部遺跡分布図	5
第4図	溝状遺構内貝層	6
第5図	各地点遺物出土状況	6
第6図	表面採集の土器	7
第7図	第1地点の土器	9
第8図	第2地点の土器	11
第9図	試掘時出土の土器	12
第10図	第2地点の土器	13
第11図	第3地点の土器	14
第12図	第4地点の土器	16
第13図	第4地点の土器	18
第14図	石 器	19
第15図	春日町遺跡第3地点の土器	20
第16図	下前津遺跡第1地点の土器	20
第17図	下前津遺跡第3地点の土器	22
第18図	下前津遺跡第4地点の土器	23
第19図	春日町遺跡第1地点・第3地点の土器	24

図版目次

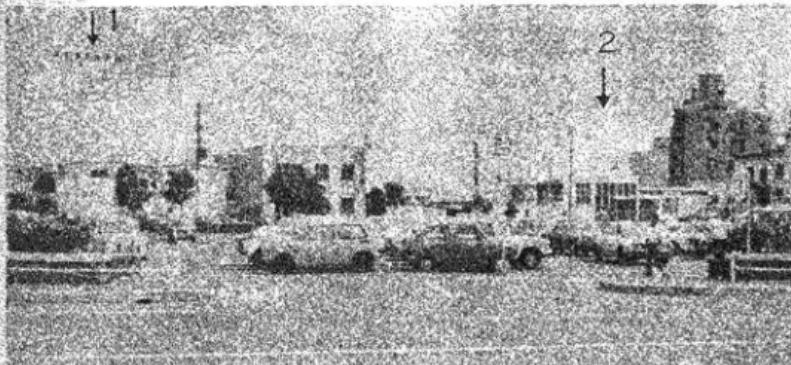
- 図版 1 上段 左表面深集の土器・右第1地点 下段 第1地点壺
2 第1地点の土器
3 第2地点の土器
4 第2地点の土器
5 第2地点の土器
6 各地点出土壺(1・2・4 第4地点 3 第3地点)
7 第3地点(1~6)・第4地点(7~10)の土器
8 第4地点の土器
9 第4地点の土器
10 各地点出土土器文様

第1章 はじめに

考古学が大学の研究室や特定の専門家だけで研究される学問であるならば、一般市民がふとした機会に発見した古代の遺跡・遺物は、なんの価値も無いであろう。しかし、日本の考古学の歴史をひもといいてみると、一般市民による遺跡の発見と研究が日本の考古学の発展に大いに寄与してきたことは周知の事実である。

私は考古学に知的関心を持った一般市民が、遺跡・遺物を発見したならば、それらを記録・保存して、その考古学的事実を第三者にも追跡できるようにすることは一般市民に負わされた道德的義務であると考える。そこで今回、私が発見した古沢町遺跡の弥生時代の遺跡・遺物を名古屋市文化財調査委員大庭義一氏・名古屋市教育委員会文化課井上光夫氏のご指導により報告するものである。

(註1)
なお、遺跡の立地・景観などについては既に「古沢町遺跡-鶴文時代編」で報告済みであり、重複するところが多いので省略した。図書を参照していただければ幸いである。



第1回 古沢町遺跡現況

- 1 : B+C地区(鶴文式土器出土地点)
- 2 : D地区(弥生式土器出土地点)



第2圖 地形圖 25.000:1

第2章 遺跡発見の経緯

從来から遺跡の存在が稀薄とされていた名古屋市中区不二見町・下前津町・古沢町の3町にまたがる地域にも、繩文時代から弥生・古墳・歴史時代におよぶ遺跡が存在し、それらは既に名古屋市教育委員会発行の遺跡分布図に一部誤った解説がついて記載されている。

それは春日町遺跡・下前津遺跡・古沢町遺跡であるが、これら3遺跡はすべて筆者がパトロール中に発見したものであり、運動の途上、土木工事現場で土取りを目撃すれば、途中下車して黒土層中に上器片が含まれていないか調べ、土器片を発見すれば該当局に連絡してきた。

しかし残念なことに、春日町遺跡は昭和38年12月に家庭建築工事で、下前津遺跡は昭和40年に地下鉄工事で破壊されてしまった。

昭和40年頃は文化財保存運動が各地におこり、遺跡の保存を要求する地頭の研究者と開発側が遺跡の評価をめぐって争う事態がいたる所で発生したが、この最中に古沢町遺跡が発見されたのである。

昭和40年8月7日、筆者は名古屋市の地下鉄工事をパトロール中に、名古屋市中区古沢町7丁目にさしかかる工事現場で其廻を発見し、その周辺に弥生式土器片が散乱していたので名古屋市教育委員会社会教育課に連絡した。この日は幸いにも文化財調査委員吉田真夫氏、社会教育課文化係横井時氏が現場に来られ、飯尾恭之氏らのご協力によって貝殻の機能を調査することができた。

しかし名古屋市南区見晴台遺跡の調査が始まったので、発見された遺跡は延日数で4日間、紅村弘・増子泰実・伊藤俊樹・飯尾恭之氏らのご協力により、部分的な試掘が行なわれただけで放棄されてしまったのである。

やがて本格的に地下鉄工事の土取りが開始されると多量の弥生式土器が出土し始めたので、やむなく私的な調査という形で、昭和40年8月7日から9月23日までの間、遺物探集と出土状況の記録に努めた。

本編で報告する資料はこの期間中に探集したものであるが、試掘時に出土した資料および下前津遺跡出土の土器も参考としてとりあげた。

第3章 遺 跡

古沢町遺跡からは、野村の縄文時代期で述べたとおり、縄文時代から歴史時代に至る遺物が出土しているが、この弥生時代末で取扱う遺物は、一部は旧金山体育館跡で出土した第1地点の遺物の他に、現名古屋市民会館の南側、今はガソリンスタンドになっている所から出土したものである。ガソリンスタンドの地盤は名古屋市中区古沢町9丁目28番地である。

遺跡は春日町遺跡・下前津遺跡・高蔵貝塚などと共に、南北に帶状にのびる名古屋台地の東側縁に立地している（第2図）。昭和30年代には、この地から東方の瑞穂丘陵の瑞穂遺跡を遙望し、前に熱田・高蔵の墓を見下すことができたが、今は高層ビルが林立し、往時の景観はない。

遺物は、遺跡を発見した当日、表土および黒土層の一部を削平中に出土したが、収集して出土したのは、第3図に示したように、土崩れ跡の土留めの杭を打つため、幅1m深さ60cmの三本の堀を開いた時に見出された第1～5の地点を含むD地区である。そのうち、第1地点と第4地点の貝層部および第5地点は、吉田寅次氏のご指導と飯尾恭之氏らのご協力により調査したものである。貝層の発見された第1、第4地点の七面図は第4図のとおりである。

第1地点

旧金山体育館の東側にある地點で、表土下1.3mの前に鹿貝層がマウンド状に堆積していた。一部は金山体育館建築時の基礎で削り取られていた。笔者が発見した当初の貝層部の観察では、表土貝層と黄色の基質土層との間に灰泥りの貝層が存在しており、この部位から彫形土器・変形土器の一品を採集することができた。

その後の土取りの進行により、貝層は金山体育館の下に続いて存在することが判明したので、昭和44年12月12日、体育館の運営を取扱し中に吉田寅次氏が調査した結果、第1地点の貝層は溝状の道横方向に堆積したものであることが判明した。

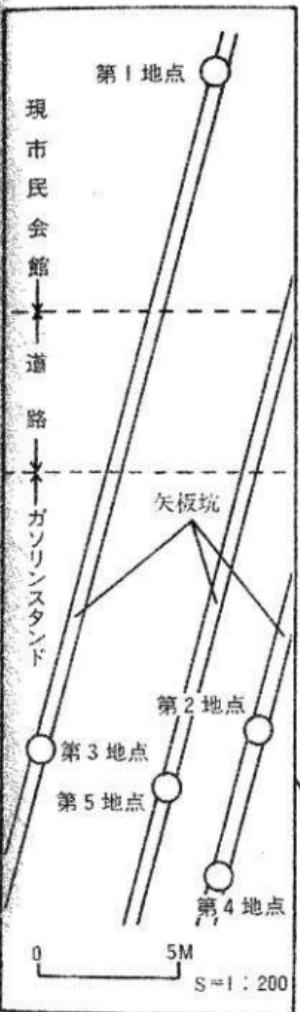
貝の種類はハマグリ（大形で主張をなす）、アカニシ（小形）、オオノ貝、サルボウ、オキシジミ、カキである。

第4地点

この地點の貝層部は昭和40年8月7日・8日の2日間、吉田寅次氏のご指導と飯尾恭之氏らのご協力により調査したものである。

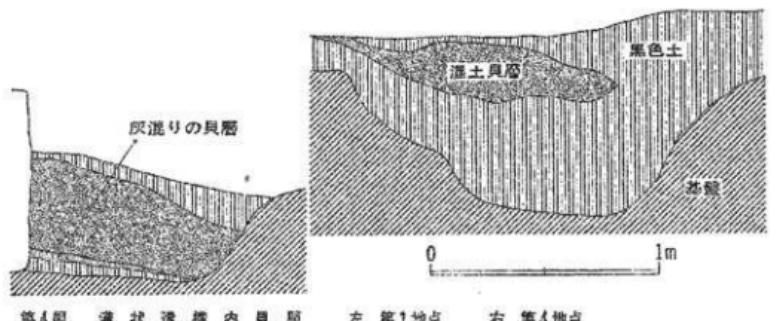
第4図に示したように、すでに表土および黒土層の一部は削平されており、貝層は溝状の通構内に北側から投棄された如く堆積していた。また表土下黒土層から弥生文化中期の彫形土器が複数の状態で出土したが、これは第9図に誌記時の土器として示した。

貝の種類はハマグリ、オオノガイ、サルボウ、アカニシ、ウミニナ、レイシ、カキである。

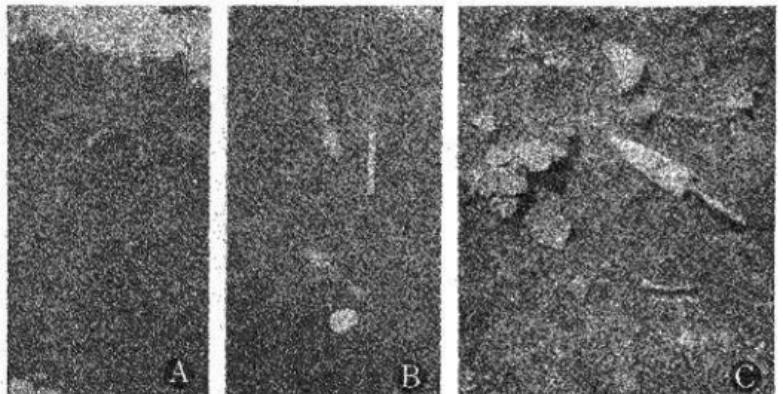


第3図





第4図 漆状遺構内貝層 左 第1地点 右 第4地点



第5図 A 第3地点 B 第5地点 C 第4地点 土器出土状態

その後、この地点の土取りが始まり、貝層の北側、貝層平行の黒土層中から弥生式土器が群集して出土したが、この一括資料は遺物の項で第4地点の土器として述べる。

第5地点

土留めの杭を打つための溝を掘った時に、黒土層より盾形土器片が出土したので試掘したものである。しかしチャート製の敲石が出土したのみで特別な遺構は検出されなかった。

第4章 遺物

4カ所の地点から出土した遺物と、試掘時に出土した壺形土器2個体の他に、表面採集した遺物のうち土師器および石器を図示して述べることにする。

第1節 表面採集の遺物（第6図）

土師器は黒土層の上部を削平中に採集したものである。

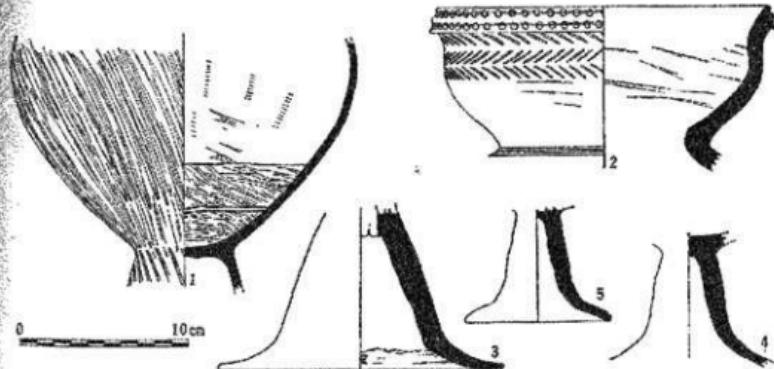
(3・4)は胸窓の裡の部分が薄くなり、外方に聞くもので、この遠方の石塚期の形態を示すものであろう。(3)の腹部上位、杯との接続部には粘土充填の跡がうかゞえる。

(5)は赤味を帯び、底部は外方に折れ先端部が丸味を帯びて下方にわずかに内傾するもので
(3・4) (5) 石塚期以降の上宋期あるいは短折切期の形態を示すものであろう。

(1)はS字状口縁台付窓の下脚部である。口縁部の形態は不明であるが、脚部断面には鋸い
かき目痕がみられ、脚台部には脚部と異なり太い施錆的別毛目文が施される。かつて吉田富夫
(1・2) 著が「頸出形」と名づけた形態を示すが、器形は長円形に近い無花果形をなすようでありS字状
口縁台付窓B類と想定される。

下前岸遺跡からも司須が2例出土している。

(2)は窓間にして類例を見ない壺形土器である。器内は土師質で、口縁部は内側し、先端部
で外方に聞くもので、第6図のように口縁端部は幅広にして2条の凹線文と円形押捺文を施し、
その下には羽状文を施している。頭部には模様書きの横筋文をめぐらしている。



第6図 表面採集の土器

第2節 第1地点の土器(第7図)

この地点の貝層から出土した土器片は、いずれも掌大のもので80片ある。

器形は壺形土器が大半であるが、それらの土器片を觀察してみると、貝層最下部の基盤に接する所、灰瓦りの層から出土した一群(壺形土器1類)と上部の貝層から出土した一群(壺形土器2類)とでは形態に明確な差異が認められる。

この差異の状態は愛知県西志賀遺跡の西志賀Ⅰ層から出土する状態によく似ており、壺形土器の1類としたものは西志賀Ⅱ式に、壺形土器2類としたものは西志賀Ⅲ式に相当する。

壺形土器

1類(1~7)

畿内地方の弥生文化中期前半の土器型式(畿内第2様式に近似するもの)に共通するタイプとして類別した。

器形には口径が25cm前後のものと15cm前後のものがある。口縁が外反し、口縁端部を幅広にして面を作り、その部分に縦位の刻み目を施したもの(1・2)、下端あるいは上下端に刻み目を施したもの(3・4・6・7)、刻み目を施さないもの(5)がある。

頸部の資料が採集できなかったのでその形態は不明であるが、この地方の遺跡に一般にみられるように、太頸の円筒形で、横線の文様帶が施されるものであろう。

2類(11~14)

(注11) 貝田町式あるいは西志賀Ⅲ式と呼ばれているものに比定できる資料である。

口縁部が内折または内折し、屈折部に櫛歯状具を押引きしたもの(13)、刻み目を施して頭部に至る部分に横線を施したもの(12)、口縁部が受口状となり、口縁端部から肩部に至る部分に闇窓を置いて波線文・横線文を施したもの(14)がある。

また貝層上の黒土層から出土したもの(11)は器面全体に波線文・横線文を施して、口縁内折部の外面と頸部に、円形押捺文を加えたボタン状貼付文を2個一组として4箇所に各々配したものもある。一宮市千秋町屋の包含地出土品に同形のものが存在する。

3類(17・20・25・26)

(注14) (注15) (注16)
反鄧貝塚・猿東遺跡・宝飯郡丸塚包含地など三河地方に見られる土器(20)がある。絵描き沈線で文様帶を区画し、その間に縦文を施したりするもの(17・25・26)があるが、一応この類に含めた。

他に壺形土器の脚部破片で、刷毛目を堆文として、横位の平行線を施したもの(15)、一条の沈線と磨消帶を平行させているもの(17)、横描き横線帶を描きによる縦位の弧線で切ったもの(19・21)がある。

壺形土器(9・10)

口縁部の破片のみで、胴部の形態が不明であり、壺形土器との形態上の区別が困難なもの(9)を一応壺形土器として類別した。(10)とともに器面を刷毛目で仕上げている。

深鉢形土器

1類(8)

口縁部は外方に開き、口縁端部に上下の両方から圧痕を加え、器表面は浅い条痕で仕上げてい



第7図 第1地点の土器

るものである。

2類 (24)

口縁部内側に櫛描き列点文を配した条痕文栗形土器の破片で、いわゆる長田町式の特徴的な土器である。

以上の仙に変形土器・深鉢形土器の底部があり、その中央部に一つの孔を穿つもの (28・29) もある。

また縦文式土器の口縁 (27) があり、この貝殻を取扱した時にも縦文式後湖の土器破片が採集されたという。^(出所)

第3節 第2地点の土器 (図8図~10図)

この地点の土器は墨土中の土器包含層から出土した断片的な資料であるが、過去における先学の編年学的研究により、これらの土器はこの地方の弥生時代中期後半に属する型式であり、高藏員等出土土器を標準とした高藏式土器と同一型式のものである。

壺形土器・変形土器・高杯形土器に分類できるが、これらの土器は少豆の前略期の土器の他は、大半が凹縦文の施された壺形土器・高杯形土器と、口縁部が外方に直角度に外反あるいは屈折する変形土器であり、この組合せは名古屋市中区下前津遺跡第9地点と共通しており、このような組合せを持った土器文化が名古屋盆地では弥生文化中期後半に出現するのである。

壺形土器

1類 (第8図1~14)

口縁部に凹縦文を施した土器である。

器形は広口で口縁部が受口状となるもので、受口状の口縁部に3~5本の凹線、腹部には櫛状具の先端で刺突した文様を配し、脚部には刷毛目で仕上げたその上に横線文と波線文を施したものなどがある。

腹部破片には2本歯の櫛状具で横線文・波線文を施したもの (8~13) があり、ほかに平行線の下位に舟形文を施したもの (14) などがある。

これらは尾張で高藏式、三河では長床式と呼ばれるものに属するものであろう。^(出所)

2類 (第8図16~18)

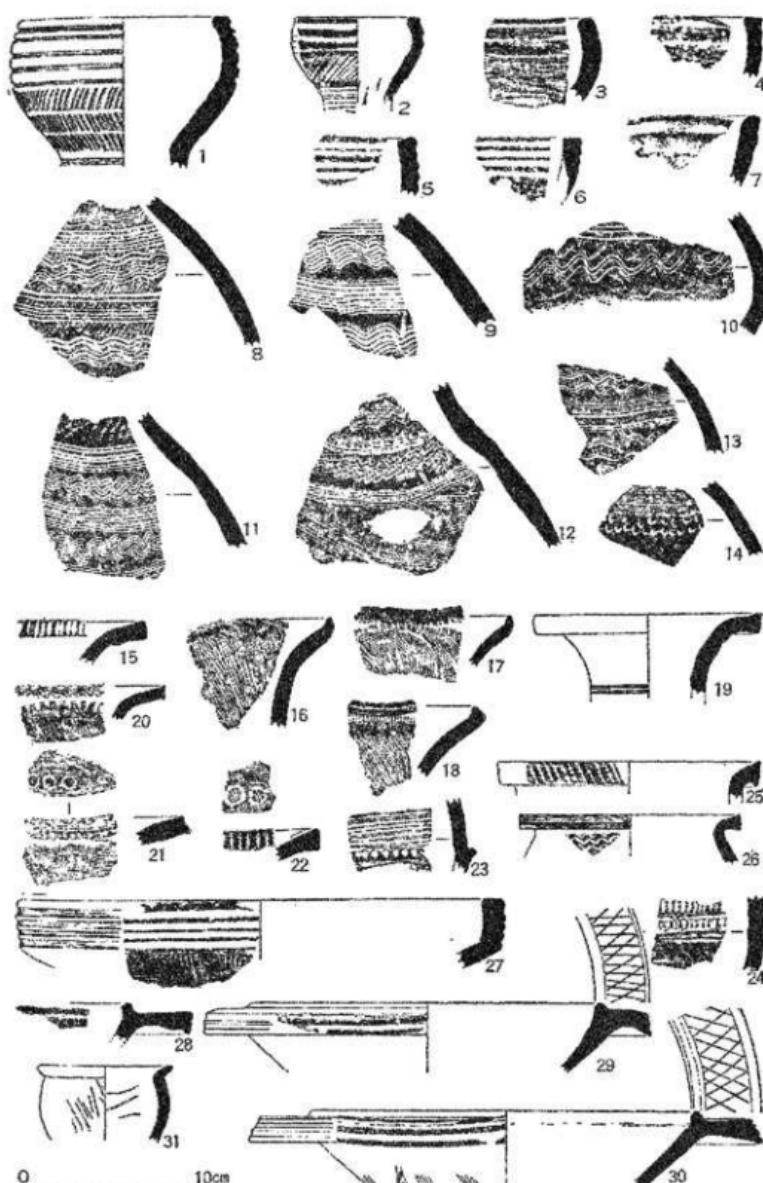
第1地点で2類としたものと同様に、長田町式あるいは西志賀b式と呼ばれているものの形態を示すものである。

口縁端部は内轉し、先端部が薄くなる。器面は3例共、刷毛目で仕上げており、口縁端の内側部外側に刻み目を施したもの (17~18) もある。

3類 (第8図15~19~22)

第1地点で1類としたもので、口縁が外反し、口縁端部を幅広にして面をとり、その部分に縱位の刻み目を施したもの (15~22) 、下端あるいは上下端部に刻み目を施したもの (20~21) がある。なお、(21~22) には口縁内側にボタン状貼付文・円形文をそれぞれ施している。

◆



第8図 第2地点の土器

4類（第8図25・26）

壺形土器の口縁部破片である。2例ともに、口縁端部を幅広にして櫛状具の刺突による斜溝の刻み目を施したもの（25）、鋸部に櫛描きの波線文が窓えるもの（26）がある。

（25）
壺形は高古第2様式の無底壺形土器にちかい形をとるものであろう。四日市市の永井漁跡S X 74方形周辺出土資料に類例がある。
（26）

鋸部破片のなかに、刷毛目を地文として一条の沈線と延びしによる磨消滑が平行するものもあるが、壺形土器1類頭部に示した2本1組の櫛状具による横線文・波線文を施した土器と同様に、一型式を認めるには資料が少ない。

壺形土器

1類（第10図5～21）

器肉の薄い頗り口縁部が外方に急角度に外反するかあるいは屈折し、口縁部内側は刷毛目により壺形され、頭部上位は刷毛目を縦横に交叉させて仕上げられたものである。

土器の最大径は頭部上位にあるようであり、底部は平底でやや上昇底のもの（18・19）や脚台（15～17・20・21）が接続するものがある。

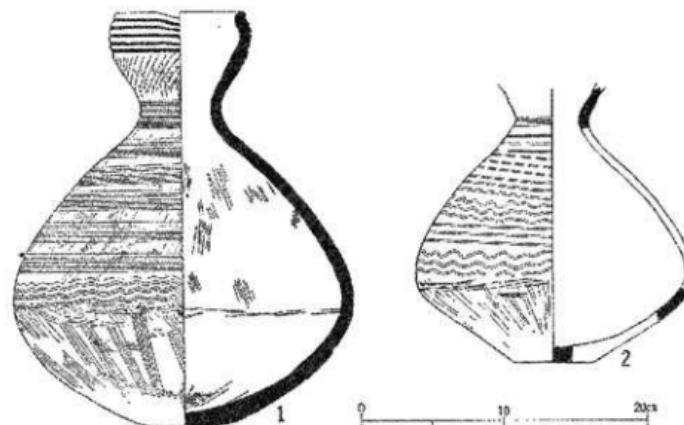
脚台は概して壺の本体部に比較して小型で、丁寧な作りである。

2類（第10図22・23）

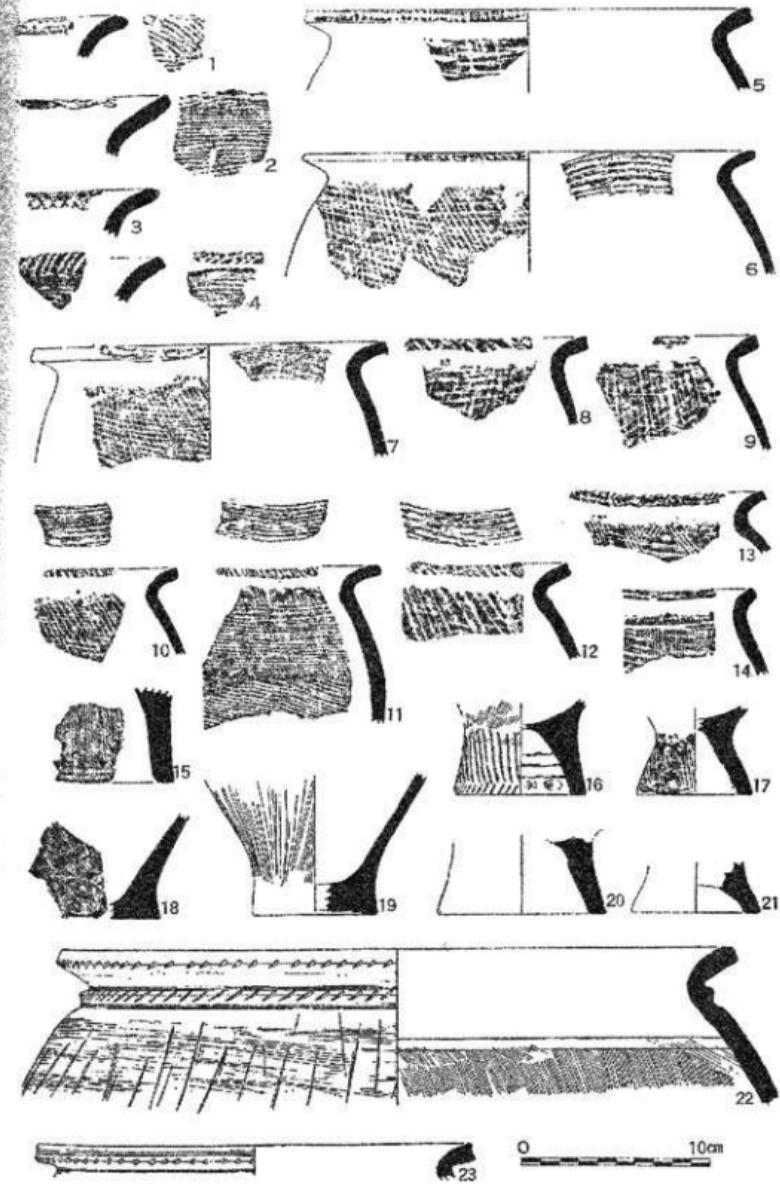
頗り肥厚した口縁部が外方に強く屈折し、口縁端部下位に刻み目を施すものである。大型の（22）は刻み目を加えた一条の凸筋を口縁直下にめぐらしている。口縁部内側は2例とも、平滑に仕上げている。

深鉢形土器（第10図1～4）

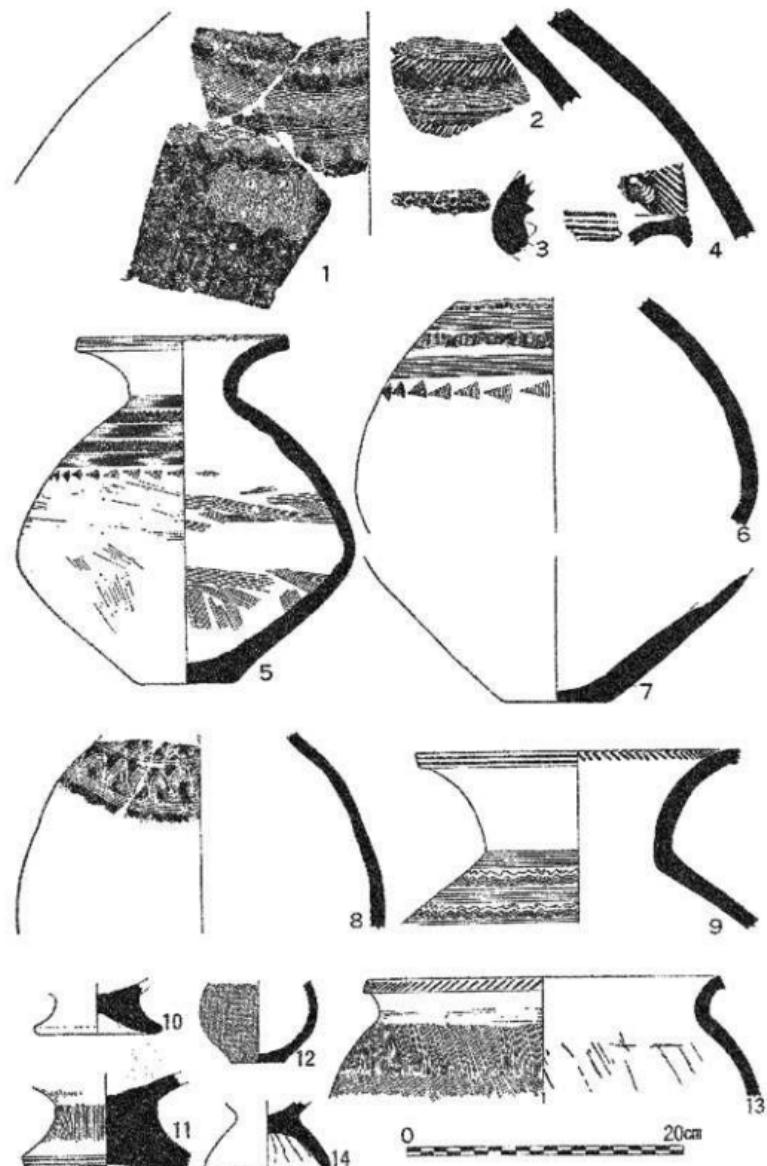
小破片であり器形は不明であるが、前型式の深鉢形土器を思い起させる。器面を模倣の刷毛目



第9図　試掘時出土の土器（ $\frac{1}{4}$ ）



第10図 第2地点の土器



第11図 第3地点の土器

や仕上げ、端面に凹痕を残すもの（2）、端部に刻み目を施すもの（3）、貝田町式深鉢形土器の形態を示すもの（1・4）がある。

高环形土器（第8図27～30）

口縁部が鉗状を示して外方にのび、口縁内側には凸筋を設け、鉗状部の先端は幅広にして凹線文を施したもの（28～30）で、鉗状部の上面に暗文の手法で斜格文を施すが、これは畿内第Ⅱ様式土器の手法と一致している。類例は滋賀県小川遺跡にある。他に环の口縁を直角にちかく折り曲げて口縁部には凹線を施すもの（27）もある。

第4節 第3地点の土器（第11図）

この地点の黒土層中から出土した土器は痕形土器10個体分、変形土器1個体分である。

土器は丸形にちかいものや、破片であっても肩部半分ほどの大型のものが出土している。補管に覆すすれば特殊な道筋が検出できたかも知れない。

痕形土器は口縁部が外方に大きく開き広口の形態を示すもので、肩部文様は上位部に集約され、一期期の特徴をよく示している。

変形土器（1～12）

（1・3）は同一個体のものであろう。腹部の最大径が1mちかくにもなる大型のものである。上肩部に櫛描きの横線文・波線文・重弧文・流水文を施している。

この脇には（3）の円形文を有する断面三角形の凸筋がめぐらされた頸部が接続するものと思われる。

口縁部が外方に開く広口形で、口縁端部を幅広にして、そこに凹線文を施して縦位の平行線で切ったもの（4）、凹線文が施されなくて指などの痕を残しているもの（5）がある。

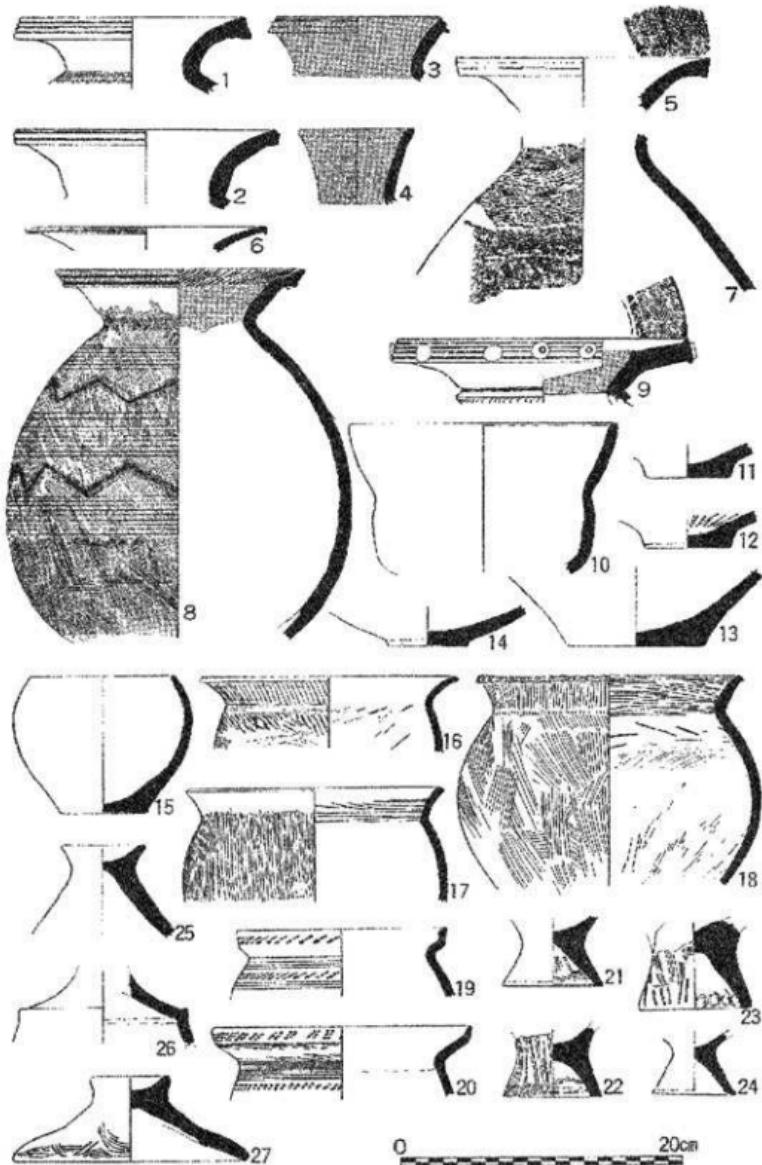
（5）は丸形にちかいもので、口縁部内側には斜線文・重弧文を施し、脇部上位には櫛描きの横線文・波線文・重頭文を施すもので、この地方の弥生文化後期の一時期の特徴をよく示している。

（8）は波瀬の高い波線文を施すもので、器面は凹凸が著しく器形は縱長になるようである。他に口縁部の立上がりがやや強く、口縁部内側に鉗状具の先端部刺突による羽状文を施したもの（9）や、小型で器面全体を赤彩したもの（12）などがある。

変形土器の脚台は中空であるが、あまり高くならないもの（10）や、器壁を縦位の刷毛目で仕上げ、底面は僅かに上げ底とし、裾の端部を幅広にして平行線をめぐらしたもの（11）がある。

變形土器（13～14）

口縁部が「く」の字状に外反し、口縁端部を広くして刻み目を付け、脇部は刷毛目で丁寧に仕上げている。瑞穂期の特徴をそなえたものである。



第12図 第4地点の土器

第5節 第4地点の土器（第12号）

この地点の土器は、昭和40年8月7日に発見された貝塚地点の北側、貝塚と併行する黒土層を上挖りのため30cm～50cm程削り取ったところ、16個体分の大形破片の高环形土器を主体として、筒形土器・甕形土器・壺台形土器の破片が群集して出土したものである。

口縁部の形態が複雑で豪華な感じのする甕形土器と無文化の傾向が顕著となる筒形土器・口縁端部に画をとり器面は縱位の直磨きにより仕上げられた高环形土器など、弥生文化後期の一時期の特徴的傾向をよく示している。

広口亜形土器

1類（1・2・5・6・7）

口縁部裏面に凹線文を施すだけで、口縁部内側には文様が施されないもの（1・2・6）、口縁部内側に羽状文が施されるが、胴部文様は上胴部の狭い範囲に集約されるもの（5・7）がある。

2類（3・8・9）

（9は2類）

いわゆるパレス式土器の概念——口縁部の形態が複雑で、口縁端を幅広くとり、そこにボタン状貼付文を加え、口縁部内側には枝で区画した文様帶に羽状文・丹彩を施し、頂部には円形文を加えた断面三角形の凸部をめぐらすもの——で説明できるもの（9）、口縁部形態は単純化して、口縁端部に凹線文は施されるが、ボタン状貼付文などは施されず、口縁部内側の枝も消失しているもの（8）があり、胴部には横線文・羽状文・丹彩が施される。

（3）は立上りの強い口縁部で内外面に丹彩を施したものであり、一応この類に含めた。

筒形土器（10・15）

口縁端部に面を作る内寄気味の口縁部が胴部に接続するもの（10）、小形の輪形となるもの（15）がある。

甕形土器

1類（16・17）

口縁部を「く」の字状に外反させ、器面を粗い刷毛目で条痕様に仕上げたもの。

2類（18）

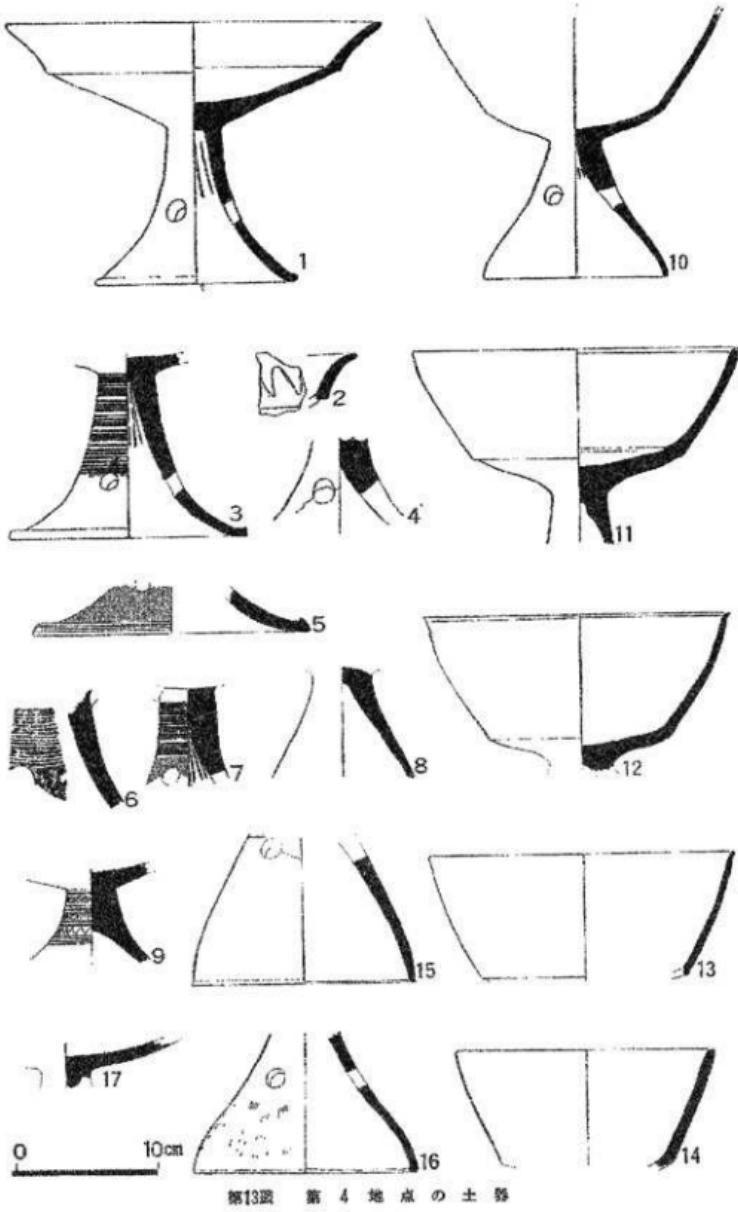
口縁部を「く」の字状に外反させ、口縁端部に櫛状具で押圧した刻み目を施し、器表面と口縁部内側は刷毛目で仕上げ、下頸部内側は茎で削りとて整形している。

上頸部は球形にちかいが、下頸部は器肉が薄くなり直線的にのびて縦長になるようである。

3類（19・20）

「く」の字状の口縁部が先端で内折し、甕形土器と同様に受口状となるものである。口縁部、上頸部には櫛描きの列点文・横線文を交互に施している。

いわゆるS字状口縁土器のプロトタイプと考えられているものである。



高环形土器

1種 (第13図 8・10~16)

本部が深い器形で、口縁部と下底部とが後を作りて接続する。口縁端部は面とりしたものと薄削るものとに分れる。

脚部は下位で内側に弯曲する。下底部内側に端部を折り曲げるもの (16) がある。脚部外面および脚部の外面は、いずれも縦溝により美しく整形している。

2種 (1~7・9)

脚部と口縁部が後を作りて接続し、口縁部は外開きとなる盤状の杯部と、幅広がりの柱状の脚部が接続するもので、脚部の上位には横溝文を施すもの (3・6・7)、亦形を加えるもの (5・7)、鉢縫文・鋸齒文を施すもの (9) がある。

これらの形態の高环形土器杯部外面には (2) のような波線文を施すのが常であるが、(1) 例は杯部および脚部には文様を欠く。壺形土器 1 類と同様に無文化への傾向を示しているものであろう。

3種 (第12図26)

(2種)
通内第V様式の高环形土器C類 (船橋出土) のように脚部に縦を持つ器形である。

臺形土器

ただ一片の出土であるが受皿部の小破片がある。

壺形土器 (第12図25・27)

2例とも、鉢を有するもので、(25) は壺形土器の脚台を想わせる器高の高いものである。

(26) 例を知り得る (27) 例は径 17cm の小型で、これを落し蓋とする脱もあるが、この径に合致する口経を持つ壺形土器も存在するので、この例は被覆して使用したものであろう。

第6節 石 器

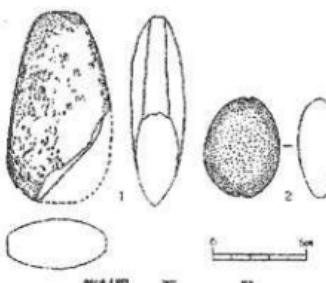
表面採集品を含めて 5 点ある。(第14図)

石斧 全体が研磨により成形され、刃部は狭く、刃部方向に向って聞くもので、刃部の大半は欠損している。いわゆる定角式の形態を示すものである。(1)

石錐 簡平丸石の両端部に幅 3mm の溝を刻み込んだもので表面採集品である。(2)

鐵石 図示しなかったが 3 点の出土があった。いずれも敲打による製作の跡が見られるもので、石斧の破損品を利用したものもある。両端部にその痕跡が見られる。

この鐵石は下野井遺跡でも弥生文化後期 (羽都 ~ 大山期) の土器に伴って出土しており、弥生文化後期になつても使用されていた石器である。



第14図 石 器

第5章 おわりに

前4章において述べてきたように、古沢町遺跡からは弥生式土器の古いものとして朝日式あるいは貝田式が出土しているが、確実なものは弥生文化中期後半の高藏期のものと弥生文化後期の矢山期のものである。

この地方の弥生文化の土器様式の形成・発展は高藏期→瑞穂期→矢山期へと漸移的な展開をたどることが知られているが、古沢町遺跡では瑞穂期のものは断片的な資料だけであり、まとまったものは無い。このことは筆者が調査してきた春日町遺跡・下前津遺跡においても共通して言えることであり、東方の対岸の瑞穂丘陵における瑞穂期の隆盛とは対照的である。

高藏貝塚には弥生時代の各時期の型式が存在するようであるが、資料の公表されたものが少ないので、この古沢町遺跡の弥生式土器と筆者が保管あるいは所蔵している春日町遺跡・下前津遺跡の同時期の土器と



第15図 春日町遺跡第3地点の土器



第16図 下前津遺跡第1地点の土器

出後しながら、名古屋台地の弥生文化の様相について述べてみたい。

第1地点の土器（第7図）は第4章で述べたとおり、朝日式あるいは貝田町式に属するものであろうが、この貝田町式の土器は少量ながら春日町遺跡・下前津遺跡から出土している（第15・16図）。春日町遺跡第3地点の長田町式土器は、第15図・第19図（1～12）に示したとおり細部彫形土器・変形土器・深鉢形土器であるが、これらは工事中に発見されたピット状の遺構から出土したものである。工事中のため遺構の全貌は不明であったので、この地点に確実な中期の貝田町式文化が存在したのか、あるいは後期の土器型式の中に残存していたものかは断定が困難であった。

また下前津遺跡第1地点の長田町式土器は第16図に示したとおり、完形にちかい深鉢形土器（16）が横位の状態で他の小破片と共に黒土層中より出土したものであるが、この地点でも確實な文化層は認められなかった。

古沢町遺跡第1地点では小規模な貝層が検出されたわけであるが、長田町式土器片はこの地点の西側に市民会館が建設された時にも広範囲にわたり出土した。

以上のように、名古屋台地東側縦には弥生文化中期の遺物包含層や小規模な遺跡が点在することが判明したが、特に古沢町遺跡第1地点の貝層中から出土した彫形土器は、局所的な現象ではあるが層位により形態の差異が認められ、西志賀遺跡の西志賀Ⅱ層の状態と全くよく似ており、このことは西志賀や伊日との村落メカニズムの対応関係を知るうえでも注目されよう。

第2地点の土器は、この地方で高蔵式あるいは長床式と呼ばれているものである。

前回、この型式の位置づけを弥生中期後半または後期初頭のいずれに定めるか意見の違いがあるところであるが、最近では大參義一・紅村弘尚氏らの中期後半説が妥当となってきたようである。

その根拠は「山中期に先だつ中期後半の高蔵期には畿内の中期後半にあたる第3様式（新）から第4様式の影響が顯著に認められる」（大參義一氏）、「畿内型の弥生式土器へ近づく高蔵式と瑞氣式との間の大きな社会的変化、石器の減少、高环形土器の急増、尾張・三河の土器型式の統一などの諸点により瑞氣式から後期とする」（紅村弘尚氏）である。

しかし畿内の影響は畿内第3様式であるか第4様式であるかは研究者により見なっているのが現状であり、第3様式とするものは「第3様式（新）から第4様式の波及的な影響が認められる」とする大參義一氏、第4様式とするものは「畿内の第4様式の型制に近接するもの」とする（紅村弘尚氏）、「畿内第4様式土器文化との急速な接近が突発的に行われた」とする飯尾恭之氏らの説がある。

第3様式とするか第4様式とするかは遺跡から出土する資料により帰納されるべきであろうが、



第17図 下前津遺跡第3地点の土器(43~48は別地点)

(註31)
この地方の遺跡を例に挙げると、知多半島の高田遺跡における畿内唐古第3様式と酷似した高杯形土器の出土、四日市市永井遺跡 S X74・75方形周溝址出土—括土器を畿内第4様式に併行するものなど遺跡個々により異なるものである。

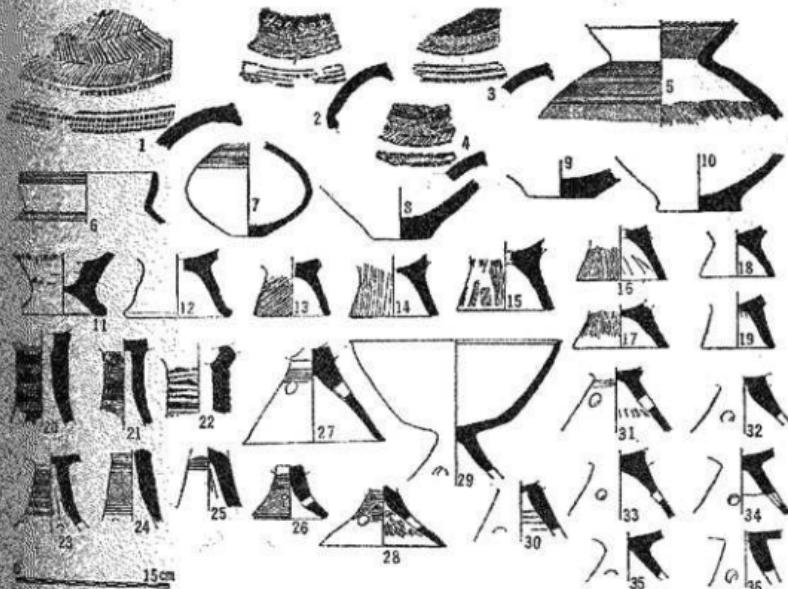
古沢町遺跡第2地点では第8図に示したように、凹線文の施された壺形土器・凹線文と暗文手法による斜格文の施された高杯形土器などに畿内の影響が顕著に見られ、この様相は約900m離れた北方の東御台地線に位置する下前津遺跡にも見られ、一単位地形内に立地する両遺跡の土器に認められる。

つぎに畿内の影響について述べてみたい。

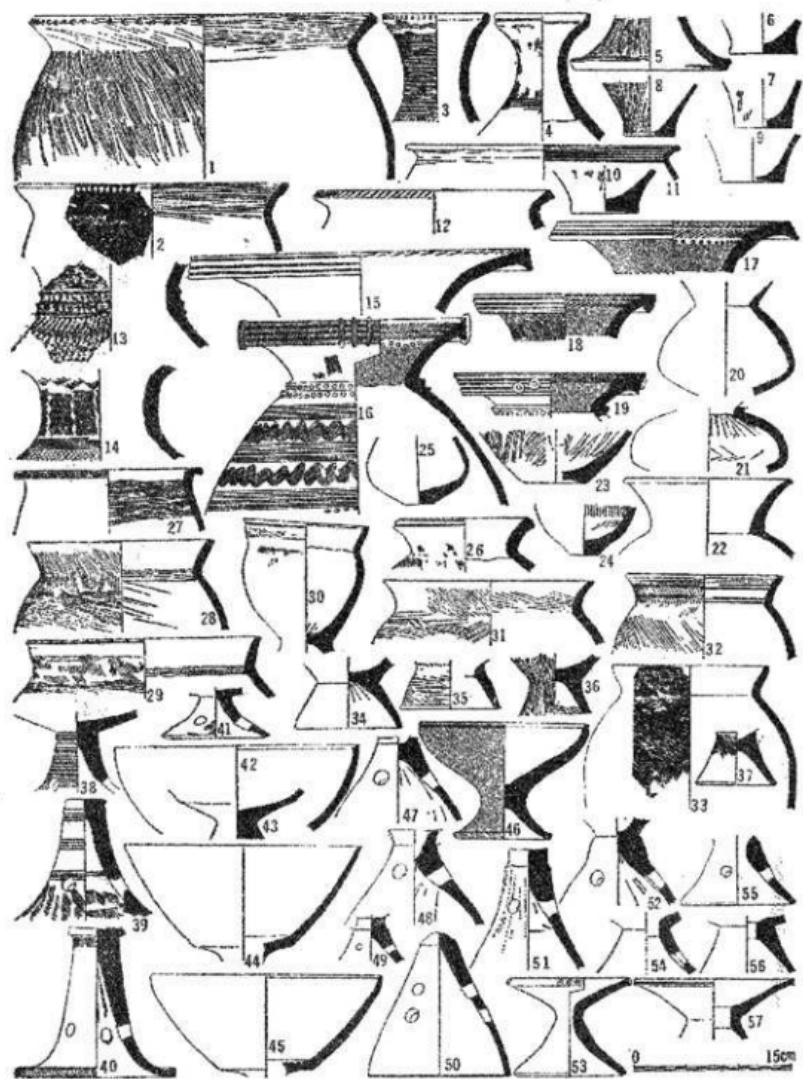
古沢町遺跡第2地点壺形土器で1類としたものは口縁部に凹線文の施されたものであり、2・3類としたものは前時期の形態を示すものである。しかしながら下前津遺跡の出土資料を見る限り、壺形土器に1類が見られないのは両遺跡の時間的先後関係を示すものとして理解すべきか。

しかし壺形土器・高杯形土器は全く同様形のものが存在し、特に高杯形土器の筒状口縁部上面の暗文手法による施文方法は畿内第三様式土器と全く一致するのである。

また下前津遺跡出土の第17図(37)は口縁端面の凹線文を縦に切っているが、類例が滋賀県小



第18図 下前津遺跡第4地点の土器



第10図 春日町遺跡第1地点(13~57)・第8地点(1~12)の土器

(注記) 他遺跡にも見られ、これは単に製作手法が伝播したというよりも土器自体が搬入されたと考えるべきではないだろうか。

器形土器にあっては廻道跡共、短い口縁部が強く外方に屈折し、肩部上位に製作・成形時の一手法として肩毛目を縦横に交叉させて整形するものが存在するが、この器形の発形土器は畿内唐古部⁹式土器に対応する兵庫県千代田遺跡の千代田Ⅲ式土器にも見られ、伊勢湾周辺はおろか、その近縁性が見られる。

名古屋台地の中央部の東側縁においては、以上のように畿内第3様式の影響が強く認められる傾向を示すのである。

第3地点・第4地点の土器は破壊あるいは欠片式に比定されるものであろう。

名古屋台地の中火部東側縁の春日町遺跡・下前津遺跡・古沢町遺跡には弥生時代中期・後期の各所の土器が存在するが、3遺跡に共通して多量に存在するものは欠山式のものである。(第6回)

欠山式土器は高杯形土器に特徴的傾向が最も顕著に認められるが、春日町遺跡・下前津遺跡・古川町遺跡第4地点の高杯形土器には、いずれも口縁部端面に面とりをし、器面を直線で縦位に整飾し、集成が極めて良好のものが存在する。しかし壺形土器・高杯形土器は第18図、第19図に示したように、弥生式土器集成・資料編にみる愛知県宝飯郡小坂井町欠山遺跡の土器や日本の考古学Ⅰ・古生時代・新版考古学講座4・原歴文化（上）に示された欠山式土器の概念で説明できな
いのが存在するのである。

第12図の縄文化への傾斜を示す壺形土器（1・2）、また第19図（16）の春日町遺跡の壺形土器、第18図（1）の下前津遺跡第4地点の壺形土器の口縁端部に刻み目を付ける手法などは明らかに別式のものであろう。

さらに高伸形土管にあって矢山式の特徴を示す高伸形土管とともに、脚部が柱状となり盤状の
盤が接するものが3箇所に共通して併存する。

このように3遺跡には各器形に共通して前代の型式の土器が併存するか、あるいは前代の器形が併存する点が挙げられる。

久山式土器は3つの時期に分類できるとして、1. 前型式の土器が久山式土器に併存している時期、2. 純粋な久山期、3. 久山式土器に土師器が併出する時期に分けられているが、名古屋台地中央部では前型式の土器が久山式土器に併存する時期が漸進的に分布するのである。

第6章 総括

古沢町遺跡調査報告書の弥生時代編が出来上った。多忙な本務の傍ら、埋蔵文化財の保存と研究に情熱を燃やし、縄文時代編につづいて本書を完成された和田さんに心からの敬意を払いたい。その意緒と真摯な態度、それだけでも驚異であるのに、なお、本書の記述は、研究者としての細心の注意力にもとづく遺跡の順序の確認と、鋭い洞察力による遺物の分析によって貫ぬかれている。

和田さんは本書の冒頭で、考古学に興味を寄せる市民の文化財に対する義務を強調し、自らもまた市民であるとして謙虚な態度で執筆に専念しているが、本書を一読すれば、仲々にどうして、専門家にしてはじめてなし得る内容であることを、誰しも感じるのであろう。

なかでも、弥生式土器の型式学的・論理学的研究には、とくにすぐれた成果が絞り込まれている。古沢町遺跡の4つの地点ごとに、そして第1地点では層位ごとに、型式の異なる土器群が存在することに注目された。すなわち、第1地点では貝層最下部の基盤に接する部分から中期前葉の朝日式、貝層上部から中期中葉の貝田町式、第2地点では馬土層から中期後半の高藏式、第3地点からは後期前半の堀跡式、そして第4地点からは後期後半の欠山式土器が、それぞれ主体となって出土することを確認された。

このうち朝日式と堀跡式は、型式組成の内容を明確にできるほどの資料には含まれていないが、貝田町式では壺（3類）・甕・深鉢（2類）・領の計7形態、高藏式では壺（3類）・甕（2類）・高杯の計6形態、欠山式では壺（2類）・鉢・甕（3類）・壺・高杯（2類）・器台の計10形態が識別され、各型式の組成内容をおおよそうかがうことができる。

全体的にみて、資料の点数はかならずしも豊富であるとはいえないが、基礎的知識に裏打ちされた詳細な分析と、さらにこの遺跡とならんで和田さんの発見にかかる春日町遺跡・下横河遺跡の資料との比較検討によって、これまで名古屋台地における弥生文化の中でも、不明の部分の多かった中期から後期へかけての発展の過程について、大綱を提示して基礎的研究を確立された。

なお、本書には3点の注目すべき問題提起がある。1つは弥生時代中期における畿内文化の影響の問題であり、つぎは聯繫式が名古屋台地には貧弱であるのに対して、岐阜台地では豊富になると、今1つは第4地点の欠山式が同一型式の中でも古い様相をみせるという指摘である。これらの問題を一朝一夕に解き明かすことはできないが、本書が問題の所在を提示し、今後の研究に示唆と指針を与えたことは疑いないであろう。

最後に、今回の調査に開闢して埋蔵文化財の保存の問題について一言するならば、古沢町遺跡は全く個人の学問的・社会的良心によって調査が行われて記録保存され、その研究成果は考古学者

の進展に一つの道標をうちたてることができた。これは、しかし、むしろ偶然の幸運というべきで、その陰には大方の目にとまらずに失われてゆく遺跡の多いことを思うべきである。研究者と住民と行政担当者が一堂に会して、それぞれの立場から意見を交換し、住民の利益を保護する道で、埋蔵文化財を保存活用する道を探ってゆかなければならぬ。それこそ急務である。

(六)

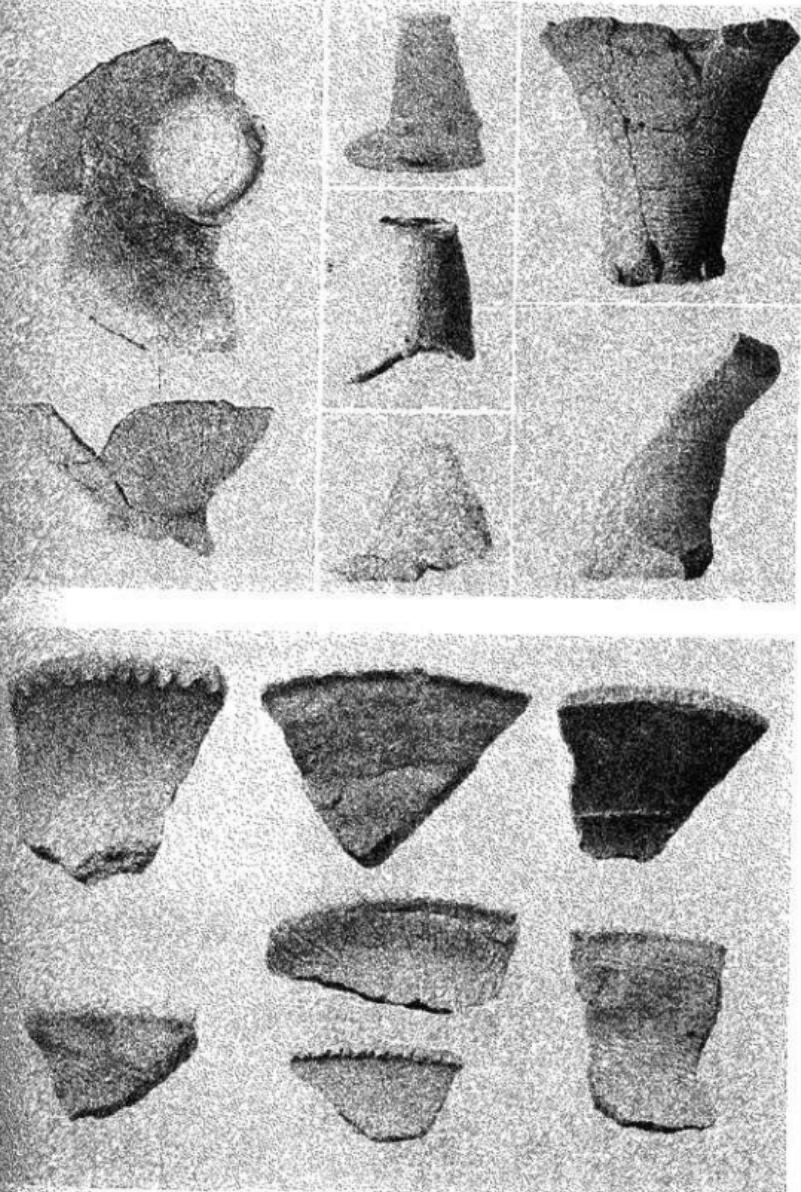
注

- 1 和田英雄『古沢町遺跡—縄文時代編』名古屋市教育委員会 昭和46年
- 2 大參義一『弥生式土器から土師器へ』名古屋大学文学部研究論集(史学16)昭和43年
- 3 彦原莊介『土師式土器集成・本編1』東京堂出版 昭和47年
- 4 大塚初重
- 5 注1・2 前引書
- 6 吉田富夫『埋田遺跡発掘調査報告』津島市史編纂委員会 昭和34年
- 7 大參義一『S字状口縁土器等』いのみや考古No.13 昭和42年
- 8 彦原莊介『愛知県西志賀遺跡』日本農耕文化の生成第一冊本文編 日本考古学会 昭和47年
- 9 江村弘『愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係』古代学研究13 昭和31年
- 10 愛知県立愛知工業高校郷土研究クラブ『芦ヶ島第2貝塚』昭和43年
- 11 彦原莊介『尾張西志賀遺跡調査概報』考古学集刊第3冊 昭和24年
- 12 注8 前引書
- 13 江村弘『東海の先史遺跡・総括編』昭和38年
- 14 豊橋市教育委員会『爪郷』昭和38年
- 15 愛知県小坂井町教育委員会『猿東第1次報告書』昭和35年
- 16 伊藤晃雄
吉田富夫『三河国丸塚弥生式遺跡概報』古代文化12の7 昭和16年

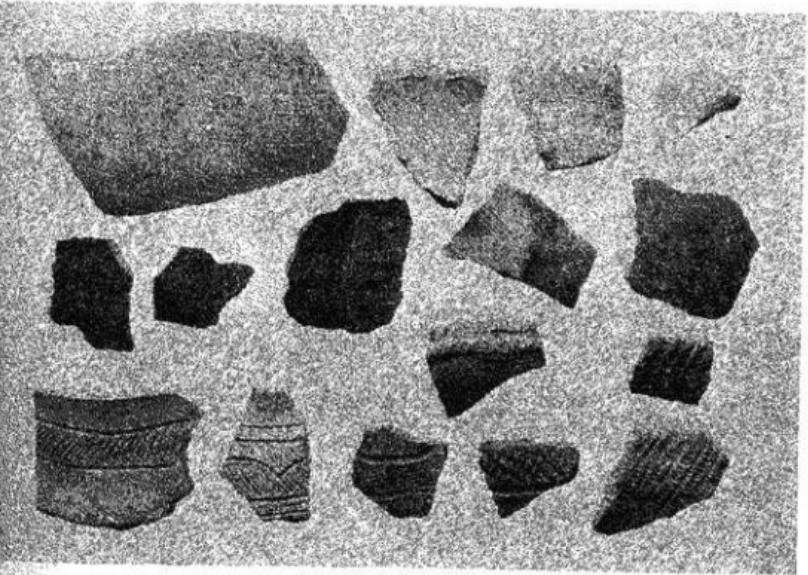
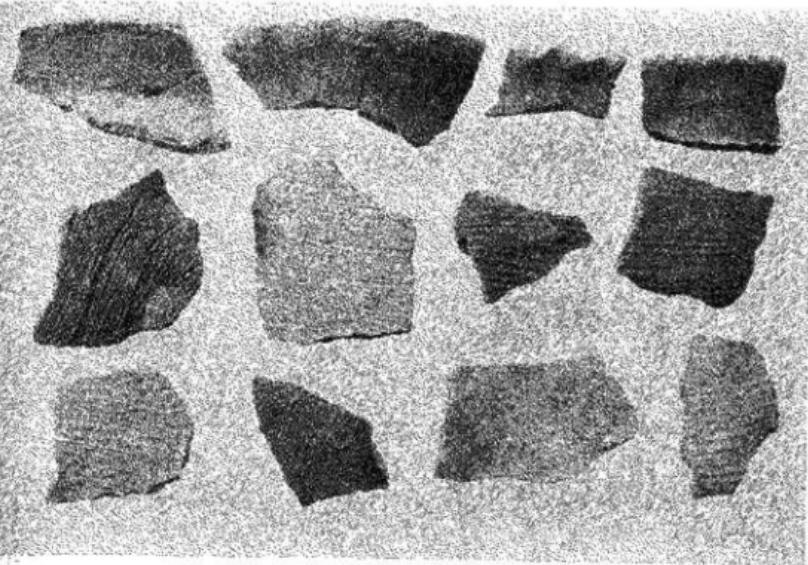
- 17 この資料は名古屋市教育委員会に保管されている。
- 18 筆者が調査したもので資料採管、未発表
- 19 久 永 春 男 「弥生文化の発展と地域性・東海」日本考古学講座4・弥生時代 昭和41年
- 20 杉 原 康 介 小 林 行 雄 「弥生式土器集成・資料編」実業社刊
- 21 四日市市埋蔵文化財調査報告7
『水井遺跡発掘調査報告』四日市市教育委員会 昭和48年
- 22 久 永 春 男 「東海地方一土器型式の推移と地域同一」新版考古学講座4 昭和44年 即ち世志賀I b式→高蔵式の間に位置する外土居式の存在があるが、第2地点の資料を客観的に見る限り外土居式の概念で把握される土器は部分的なものでしかない。
- 23 杉 原 康 介 小 林 行 雄 「弥生式土器集成・本編2・高蔵式地方第1式土器」東京堂出版
- 24 注2 前引書
- 25 注20 前引書
- 26 清 田 正 一 大 参 義 一 岩 見 司 「新編一宮市史 資料編二 弥生時代」昭和42年
- 27 注2 前引書
- 28 紅 村 弘 「土器型式についての考察」見晴台遺跡第1・2・3次発掘調査概報 昭和41年
- 29 注13 前引書
- 30 飯 尾 蔡 之 「尾張における後期弥生式土器の縦的研究(1)」古代人27・28 昭和48年
- 31 立 松 宏 「知多半島における弥生式文化の発展」半田市説明さん委員会
- 32 注23 前引書
- 33 久 永 春 男 「各地域の弥生式土器・東海」日本考古学講座4・弥生文化 昭和30年

図 版

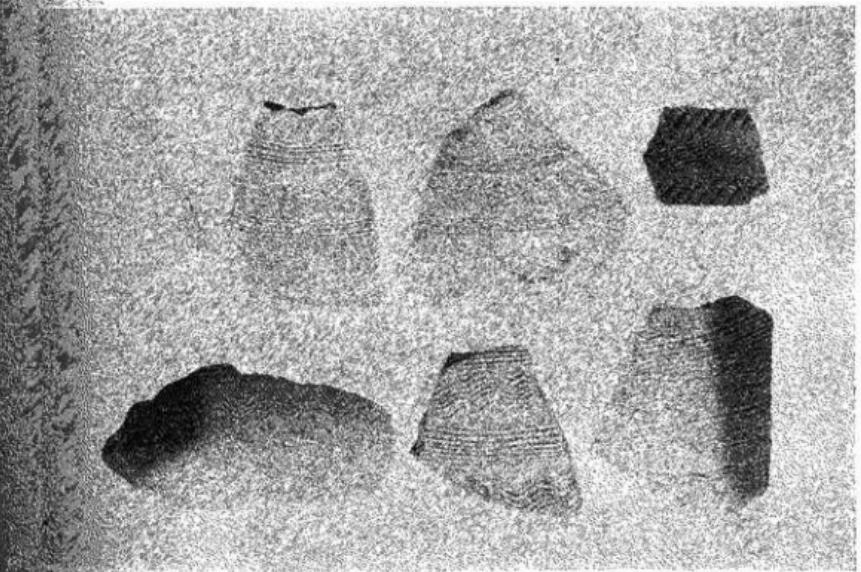
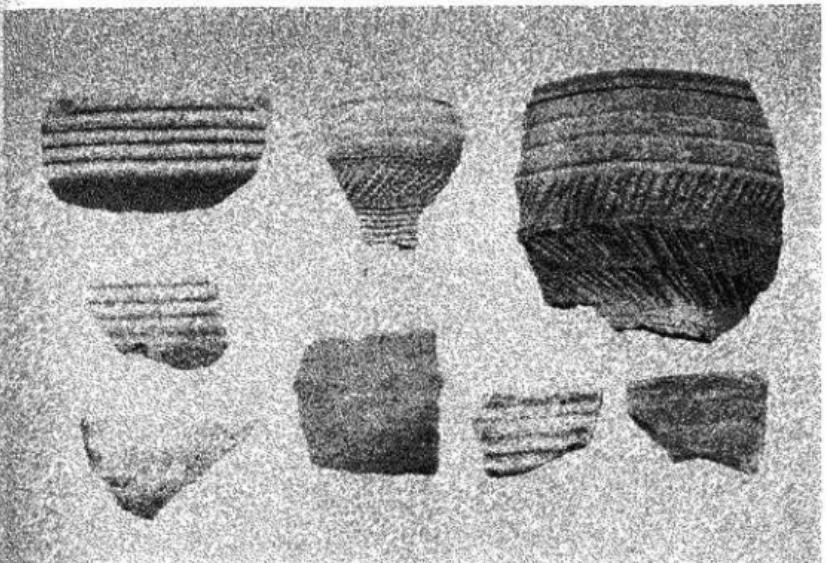
図版1 上段 左表面採集の土器・右第1地点 下段第1地点



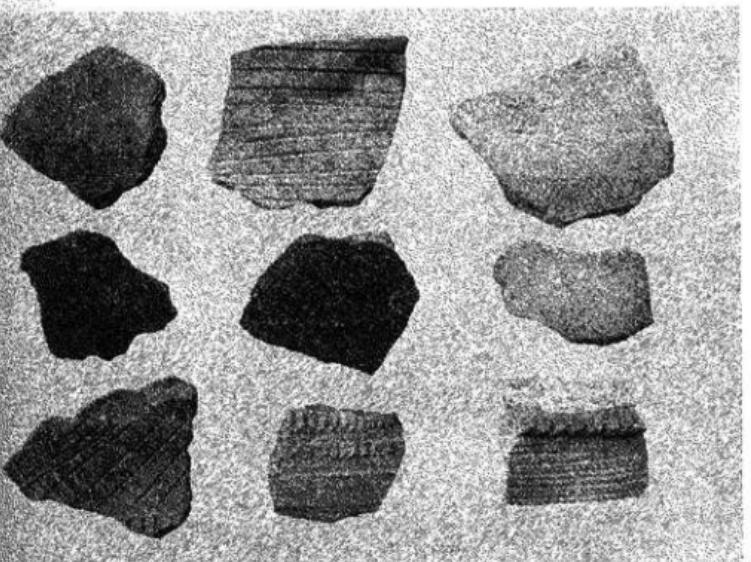
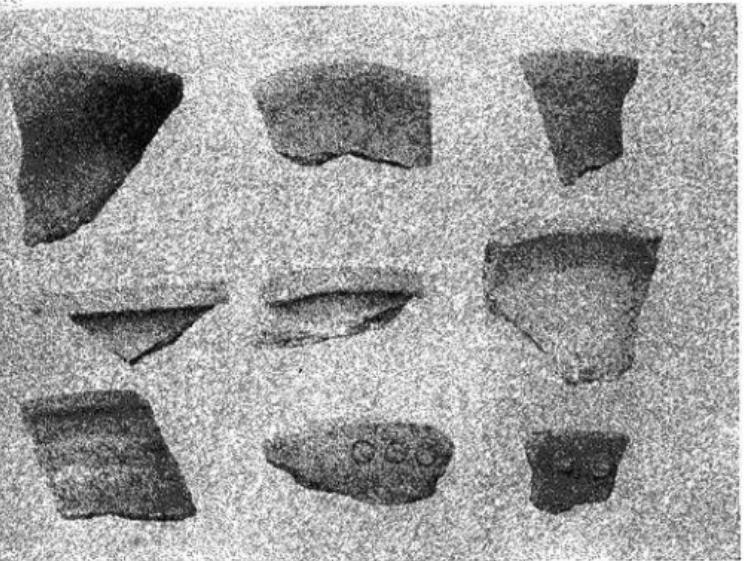
図版2 第1地点の土器



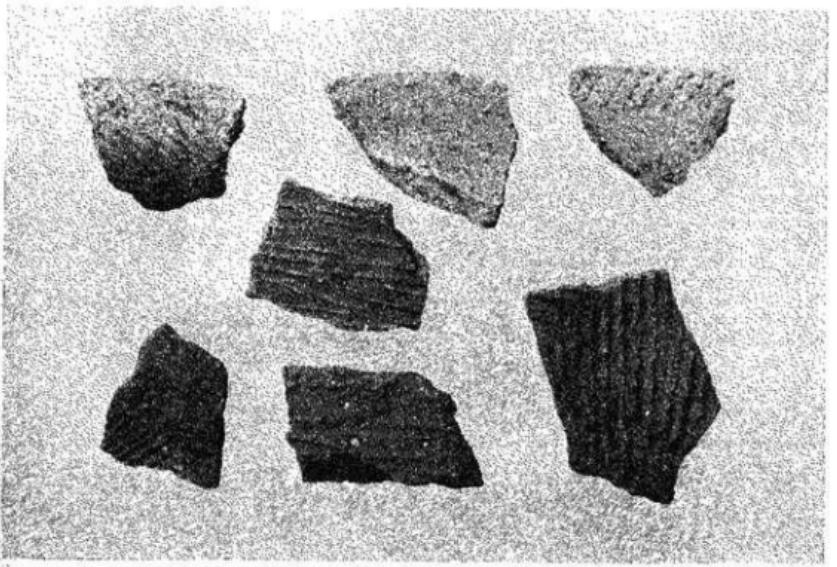
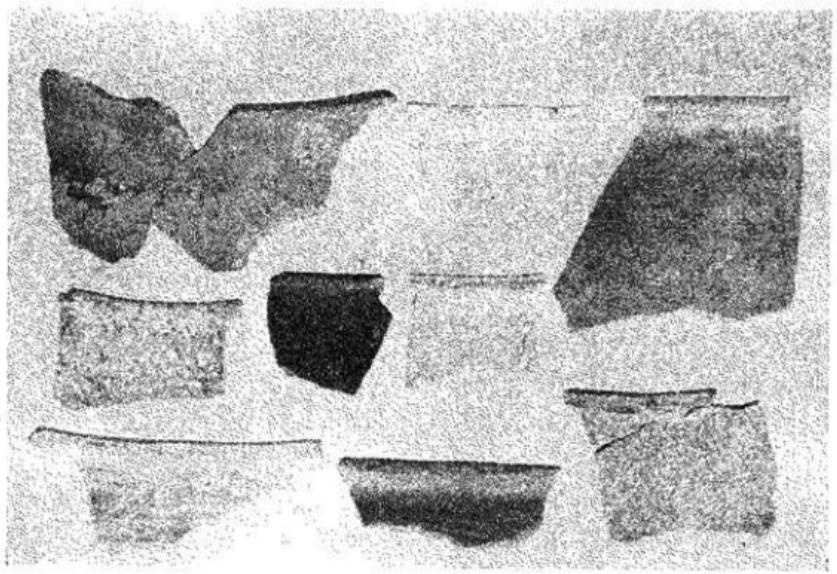
図版3 第2地点の土器



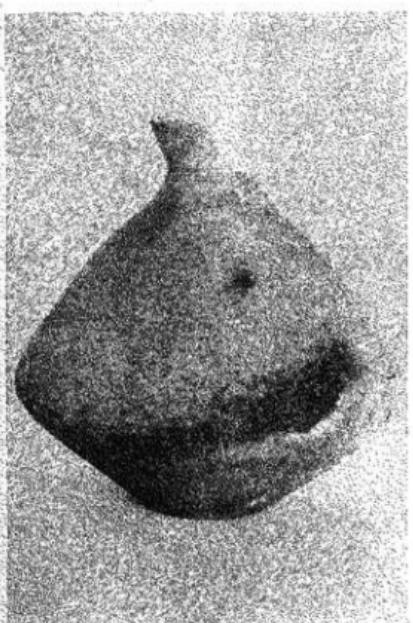
図版4 第2地点の土器



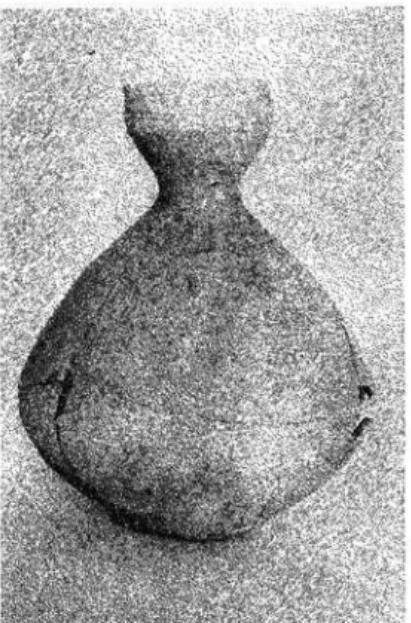
図版5 第2地点の土器



圖版 6 各地点出土壺 (1・2・4第4地点 3 第3地点)



1



2

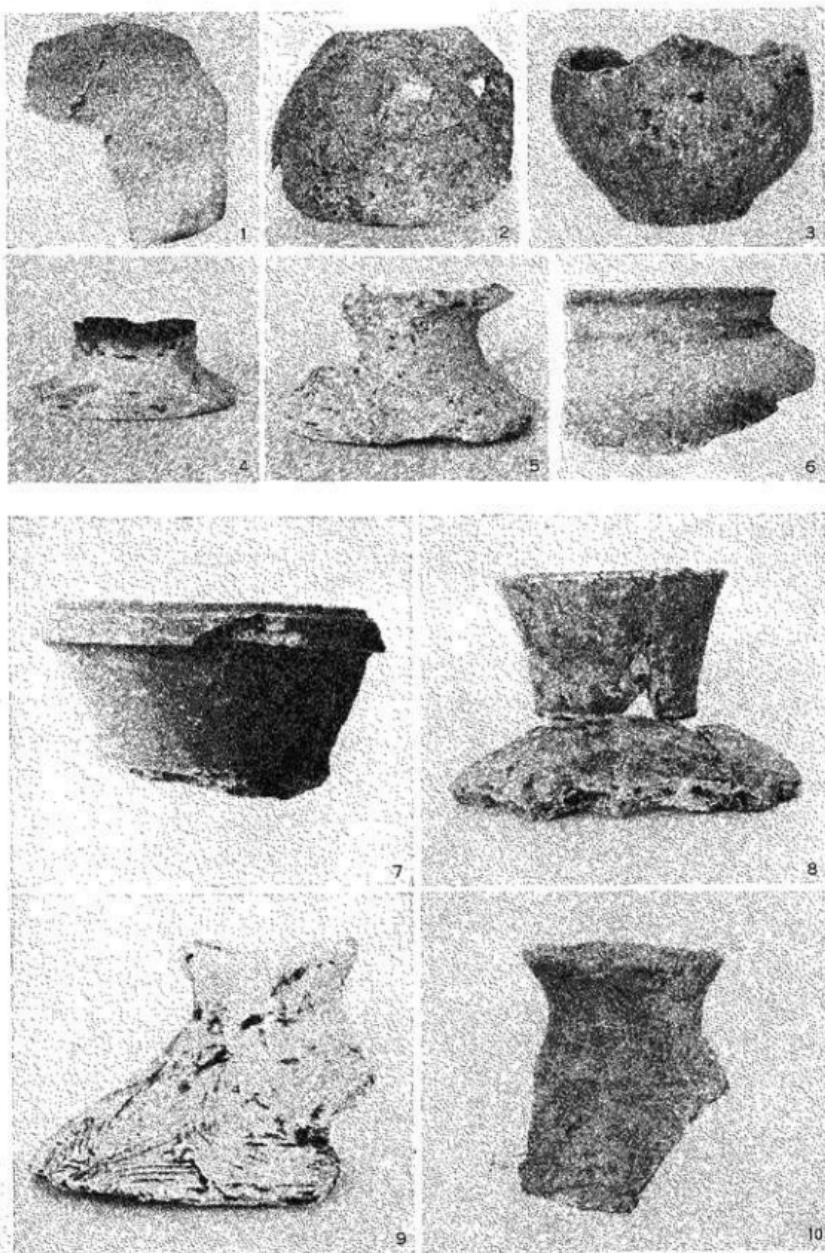


3

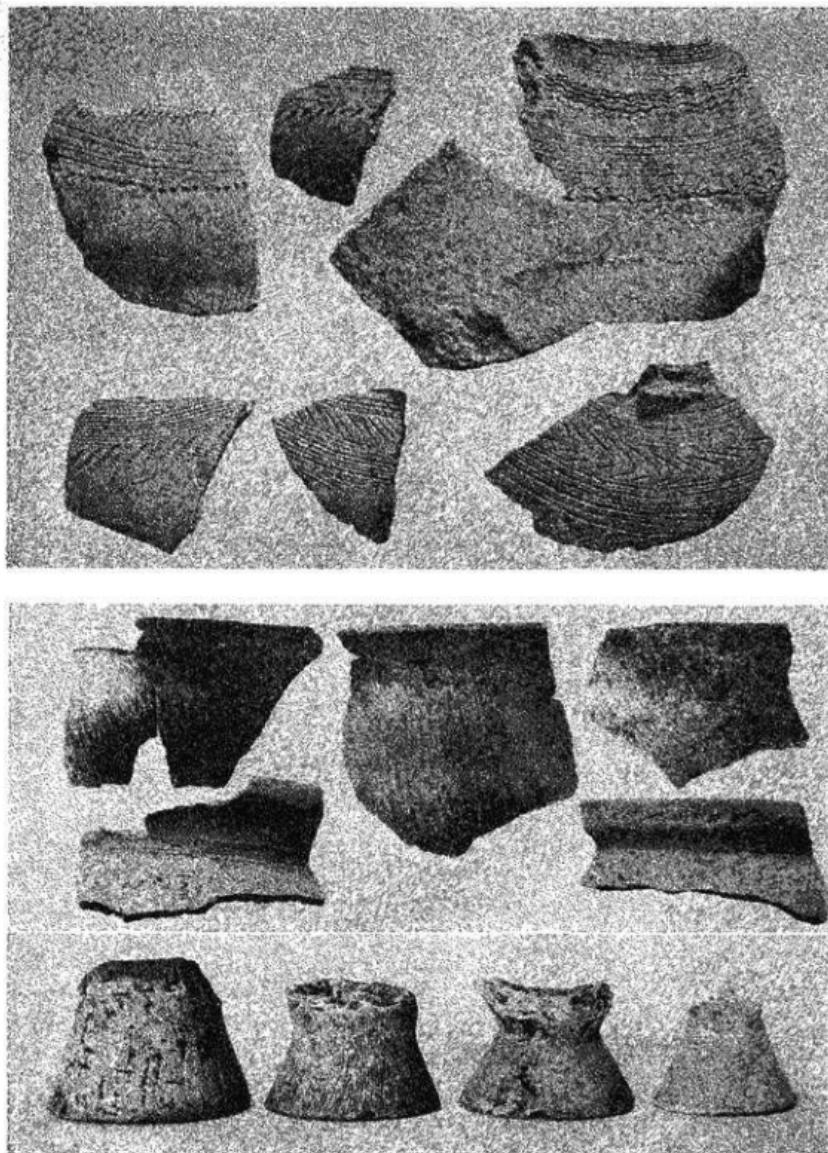


4

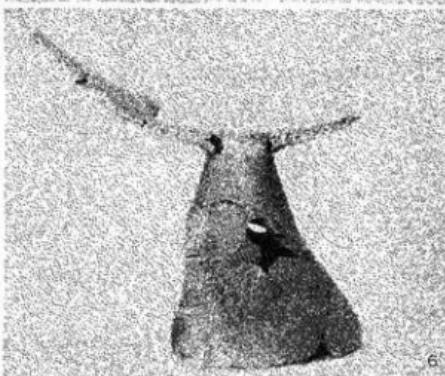
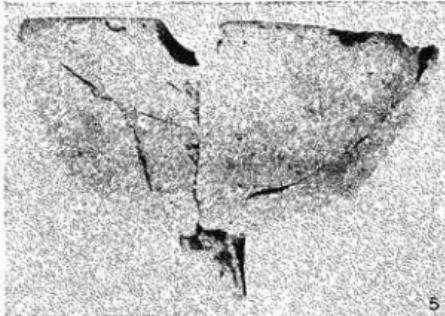
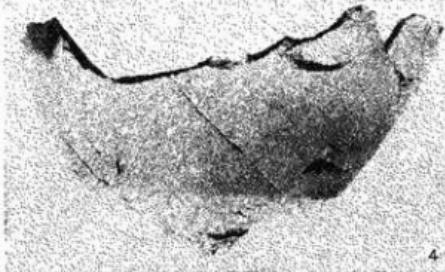
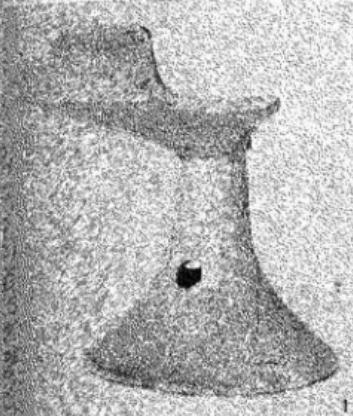
図版7 第3地点(1~6) 第4地点(7~10)の土器



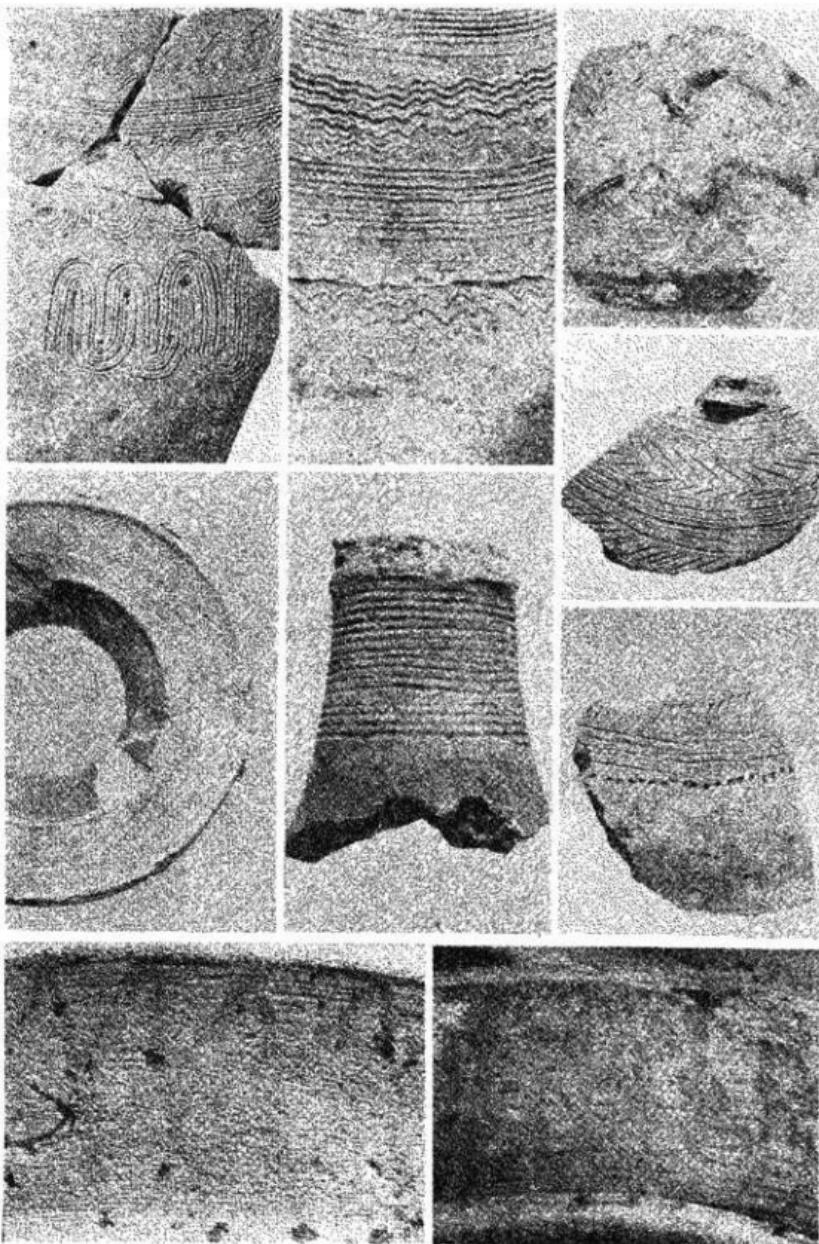
図版8 第4地点の土器



図版9 第4地点の土器



圖版10 各地點出土土器文樣



名古屋市文化財調査報告Ⅱ
古沢町遺跡発掘調査報告 一弥生時代編一

昭和 49 年 11 月 30 日 印刷 発行

編集者 名古屋市教育委員会社会教育部文化課

発行者 名古屋市教育委員会
名古屋市中区三の丸三丁目 1 き 1 号

印刷者 株式会社 新興印刷社
名古屋市東区東芳賀町 2 の 108

発行部数 400 部 無料

